

〈女と男〉のミニ雑誌〈あごらミニ〉 ●何でも言える

●何でも書ける●小さな〈ひろば〉=AGORA・〈あごら〉

●あなたの声を待ってます。みんなでつくる〈あごら〉

あごら

MINI 〈33号〉
1979年11月10日発行 ¥100 〒25

今月のなかみ

〈編集担当・あごら九州〉

表紙のことば 婦人問題懇話会に参加して……………	田辺 幸子……………1
これでいいのか〈あごら九州〉……………	小島 豊子・福田 光子……………2
講演「自分が変われば社会が変わる」より……………	三好久美子・池田 保子……………5
講演によせて……………	後小路 久・小島サカエ……………5
アンケート 女に生まれてよかった!?……………	森崎 民子……………6
お知らせ 女をつどい・女の講座……………	岡北 博子……………8

婦人問題懇話会に参加して

田辺 幸子

さる十月一日、福岡県ではやっと県内行動計画（仮称）づくりへの提言が――まだ中間答申の段階だが――知事に提出された。民間に委嘱された三十二名の委員（うち男性九名）からなる婦人問題懇話会が、昨年九月から一年余をかけた、のべ三十三回の会議を重ねた結果の提言である。

答申書の内容は、一、社会参加・教育 二、労働 三、家庭・健康・福祉の三部門に分けてまとめられ、五万字にのぼるものである。遅速のちがいはあれ、各県でもそれぞれ行動計画策定に入り、あるいは既に計画実施の段階に入ったところもある。福岡県の場合、これとさら他県と異なっているとも思えないが、以下各部門の柱だけを記してみたい。

まず社会参加・教育部門では●審議会委員等への婦人の積極的登用（知事は当面の目標として婦人委員の率を二〇％にすると公約）●行政部内の女子職員登用の普及と活動の促進●市民活動参加の推進●婦人問題の内容見直し●結婚前女性の教育推進●婦人教育にとり残される人々への対策●学校における男女平等教育の実現●学校教育と社会教育の相互乗り入れ●婦人問題研究教育センターの設置●国際文化交流・情報セン

ターの設立

労働部門では、●雇用における平等と地位の向上●職業訓練と雇用の促進●商工業・農漁業に従事する婦人の問題●健康と母性保護●婦人労働のための社会条件の整備●社会一般の意識の変革、家庭・健康・福祉部門では、農山漁村における婦人の問題●健康に関する問題●老後生活における問題などで、以上に関する具体的提言項目は百二十七項目である。

さらに各部門共通の要望として、①県婦人対策室（懇話会が強く要求して今年六月実現したもので室長・係長は婦人）の拡充強化、②懇話会を法的根拠を持つ審議会にする、の二点が打出されている。この中間答申はさらに補足して正式なものとし、これを最大限に生かした県の行政計画が今年度中には策定される予定である。

私は懇話会委員の一人として作業に参加し、怒りを新たにしたり。それは差別されてきた女性の痛みを積極的に解決しようとする熱意不足の行政への怒りであり、懇話会男性委員の出席率の低さに対する怒りであり、そして国内行動計画ができて三年余、県内に婦人問題の活動の火の手を燃え上げられなかった、私を含めた婦人自身への怒りであった。

天皇制・女

―天皇「罪位」50年を問う―

編集 婦人民主クラブ
天皇訪米の意味するもの……針生 一郎
教育と天皇制……村田 栄一
わたしの内なる天皇制……もろさわようこ
天皇制差別の底辺から……宮沢志津子
あなたの中に天皇はいないか……朴 南
350円 〒120円

女の老い

編集 婦人民主クラブ

高齢化社会がやってくる。私たちがこの問題をどう受けとめるか。年金を現行の積立方式から賦課方式に切りかえさせよう。五万円を獲得しよう。男社会の中で女としての生きがいを探ることから出発した第一集です。
150円 〒140円

私たちをとりまく公害

―婦人民主クラブ活動年表―

編集 婦人民主クラブ公害部
婦人民主クラブは1946年廃墟の中に生れ同時に婦人民主新聞を33年間継続して刊行しています。その中から私たちの反公害運動や記事を年表としてまとめました。
300円 〒140円

婦人民主クラブ

東京都渋谷区神宮前3-31-18 ☎ (402) 3244
振替東京8-196455

これでいいのか 〈あこら九州〉

●女も生きやすい世の中を

小島豊子

九州の地方新聞に「女たちの時代」というシリーズがある。一回につき一人の女をとりあげ、その活動や主張を掲載するのだが、その取材の申し込みを受けた迷ったが、結局一人でも多くの人に「あこら」を知ってもらおうせっかくのチャンスだからと承諾し、記事となった。迷った原因は二つ。一つは「あこら九州」としての取材ではなく、一人だけがクロージアアップされること（これはシリーズの性格上、今回だけグループというわけにはいかなかった）。もう一つはそのことによる勤め先への影響。

心配どおり会社側からは、自主的に集まっていた婦人部への締めつけが行なわれた。

もともとお茶くみ問題に始まり、私的な雑用拒否や朝掃除のことなど、確かに成果があったが、それ以上の「格差は正要求」等になると全然進んでいなかった。ひとりひとり、特に年代による働くことへの意識の違いがあり、この二年間に結婚でやめたり人が替わり、単なる親睦会のようになっていた。だからこそ攻撃を受けるともなかった。わずかに十人の女

は内側から崩れていった。

私は一体何のために「あこら」に関わろうとしているのか。自分の足元がこんな状態で、女の運動を考えていけるのか。私と同じように各人、問題をかかえている。その悩みを出しあったところで何の解決になるのだろうか。今回のことでも私が相談したのは社内の親しい女たちだった。自分のことは結局自分でしか解決できない。では私は「あこら」の人々と、どこで、何のために結びあおうとしているのだろうか。

「あこら九州」の停滞がいわれて久しい。年代の幅も大きく、立場もそれぞれ違う。一番象徴的なのは私と母との関係ではないだろうか。母も「あこら」の会員である。「お母さんと一緒にいいですね」とよくいわれる。彼女は五十代の主婦。私は独身の会社勤め。女同士だからというより、母娘ゆえにこたわりもある。こたわりをなくし、本当にいい関係になりたいからこそ、お互い「あこら」にいる。今回のことで、直接的なことでは力となり得なくても皆から励まされたことは事実だし、また「こんなことくらい何でもない。もっと大変な状況でがんばってきた先輩が「あこら」にいるじゃないか」と自分に言い聞かせ、支えになったのも事実である。ともすれば安易な生き方をしようとする私を、後から押し出す力で

もある。女も生きやすい世の中を作りたい。どうすれば変えていけるのか。そんなことを自分ひとりではなく皆と考えていける、それが「あこら」なのかも知れない。考えるだけでなく実際の力となるには、どうしたらいいのか。それがいつも私たちの前に課された問題であるのだが。

●女が学ぶということ

福田光子

女が集まること、話し合うこと、そこで確かめあうことが必要だとしても、それだけでは運動になり得ないことは、よく承知している。

運動とは何なのか、その長い模索の中で共通の問題をさぐり求めることが続いている。あこら九州」という小グループのメンバーは、しよつて背景も、立場も、まちまちで、ひとりひとり皆違う。メンバーも時々変わるし、いつしか去って行った人もいる。この中には、「生涯教育」と聞いただけで苦い後味が口に残っている人もいと思う。あれから二年が経った。

そのころ私たちは「おんなど生涯教育」をテーマに何かをまとめてみようとした。折から、合理化の波にさらされた福岡市の公民館の存在が、「明日の西日本を考える」という中心課題の形で、ローカルニュースを賑わしていた。これにとびついた早計な私の提案で始まった公民館の実情調査や社会教育の勉強会で、ある日突然ひとつの疑問がぶつつけられた。テーマが唐突すぎる。もっと切実なもの

やもやとしたやりきれない主婦の悩みをかかえているものにとつて生涯教育は、二の次のこと。上からのお仕着せのテーマで語り合うことなんかまっぴら。

「あこら九州」から脱会者が次々と去っていった。去つてゆく人々たちへの惜別の言葉も用意されないままに。青い果実のままに落ちてしまった、一つの事を、あれこれ考えて、やはり醗酵とか熟成という事実の重い意味を噛んだ。

これまで、私たちが受けてきた抑圧や差別的教育を否定し去ることによつてあらためて「人間として」の自覚に立とうとするならば、「生涯教育」（生涯学習）という言葉は、過去の教育への批判と挑戦の中から、真の姿を立ちあらわさなくてはならないと思う。言葉の常識的な意味をこえて、私が、「生涯教育」にこたわりつけているのはそこにある。

手すきび、筆すきびを拒絶する学習の内容と、それを学ぶ主体との緊張関係の中に運動としての一面が備わっているものではないだろうか。いいかえれば、女をとりまく矛盾や差別に目ざめてゆく学習が、運動と切り結ぶ側面なくして、女の学習の意味は成立し難いと思う。

●あこら九州について

三好久美子

いきさつは知らないが、映画の自主上映を準備中とか、一年前とはずいぶん変わっているようなので、時期はずれのことを書いても悪しからず。

私が会社を離れて三か月半。まだ仕事

のことで電話がかかってくるにもかかわらず、会社の動きや業界の変化、技術の進歩に取り残されてしまった焦りと苛立ちを感じる毎日である。ところが「あこら」には全くこれがない。いつでも誰でも参加できる雰囲気を持っているのも、因だが、多分一年前からたいして変化進歩?していないだろうと思えるからだ。もしそうでなければ、諸悪の根源は私ということになるのかも……。

なぜこの状態から脱皮できないのか。過激な運動に対する批判から「地に足ついた」を意識するあまり、地にのめりこんで動きがとれなくなっているからではないだろうか。また私のことを白状すると、一か月四一五時間以上、時間と労力を費やすのはしんどい。例えばこの文章さえ、という熱意のない参加意識しかないのも原因だろう。

現在、非常に迷っている問題がある。ともすれば楽な方に決めたがる自分にブレーキをかけているのが心の中の「あこら」の部分で、今までも「あこら」はそういう存在だったし、それでいいと思っていた。皆の口をついて出た、山ほどある差別が自分の身近に起きたときだけ憤慨し、解決方法を悩み、時に行動をおこす。

その自分の考えを深めるのに「あこら」の本誌やミニ、会員の人たちの意見は重要であった。しかしその問題を一歩ずつめて社会的にみることは熱心でなかったと思う。理論的に理屈ではだいいふ話し合っただけ。自分の場合はこの辺で妥協するしかないが、十年後の誰かは二十年後の誰かは、もう少し良くなるよう

に、というように自分の問題を考えることから発展させる気持ちなくしては、活動とはいえないと思う。

そこで提案——①「あこら九州」を会員の生涯学習なり、自己研鑽の場とするなら、会合の進め方自体を、いろいろ試してみる。

例えば、読書会や具体例を一般化する練習、対立意見をだして討論する、話し合う人と見る人にわかれ、討論自体を分析する、タブー視されがちな話題をテーマとして挑戦する、冷静な自己批判、自分の内なる差別意識を掘りおこし変えていく努力をし、報告しあう、など——。

提案②「あこら」を解放運動のグループとするなら、とにかく具体的に行動し、会ではその報告と反省、次の計画をたてる。例えば、各人の家庭での差別を具体的にあげ抵抗していく。月に一人以上「あこら」を紹介したり誘ったりする。会員や誌友をふやすことに努力する。映画上映、講演会と公開討論会。行政問題を長期計画で調査し働きかけていく、など。

例については思いつきで並べてみたし、①と②を分けることもないと思うが、会を結成し何かをするには、一人一人に負担がかかるのは当然で、今の「あこら」にはそれが無いから進めないのだと思う。「あこら東海」の話も聞いていても、「あいた時間」に「あこら」ではなく、みんなが「あこらあこら」と熱中してやらないと、会の進歩はないと思う。でも、このように具体的に行動を起こすとなると、私にはまだ覚悟ができてなくて、チョット逃げ腰になるけどな。

●ぶつかりあいたい

池田保子

「ひとりひとりが生き生きとしていて集えばみんなの躍動感の伝わってくるようなグループでありたい」という想いを私たちの集いに熱く期待している。そんなグループを創りだしていく自分でありたいのに、いつの間にか委縮している自分を感じるときは自虐と疑問「なにかが違ふみたいだ、どうしてどうして」そのあげくには悩むのは明日にしようというこ

とで忘れさるうとしていく。

サークル活動の経験は無し、勿論女たちのグループなんて初体験。でも自分はあの時女たちを求めていたからごく自然に「あこら九州」の呼びかけにとんでいったのだ。最初の会合の気持ちはくつきりとして今でも思っておこせる。だから、今のなぜか足どりの重い自分に、理由もなく(いや理由はああるらしいって気がするが)「疲れた」という言葉を禁句と命じて何やらしゃべっているような気がする。

今年の夏は、名古屋の全国大会に参加したし、広島の子のグループとも出会えたことで、私の女たちのグループに対する想いは冒頭の言葉に固まってきた。やはり私は女と組んで生きていきたいのだと確認できた。本を読んで自然に頭の中に頑固に住みついている口ざりの良いおんな論を自分の体を通して崩して再構築していくしかあるまいと思った。私が一緒にいたい人と、どんな社会の中に生きていくのかを探っていくうちに、自然に

私のおんな論もできていくだろうと思えてきた。なによりもまず自分が生き生きとしていくなくては、誰に出会えるというのだろうというところから、いまの自分の仕事に対する気持ちや生きていく姿勢に大きな疑問符が浮きでて見えるのがつらい。自分が既に現状維持で安定を求めている気持ちなのもよく知っているし、冒険心といっても自分の生活をこわさない程度のちよびり好奇心にすぎないことも、いやおうなくわかる。こんな自分ではない「いい女」にあいたいよ、なんて憧れのスターを求めている根っからのミスターなんだなと思う。あこら九州で消極的な自分が、すこしずつ変わってきているけど、そこから夢が飛躍しすぎてしまったというところだろうか。

「あこら九州と私」というテーマのつもりが、私的心情のなぐり書きになってしまいつつあるけれども、いまの私には「あこら九州」を単なる組織とも割り切れずかといつて中で自分が何をやっていくかという具体性はみえてこず、ただ自分が生きていくことをみつめる中に、女たちが視野に入ってきてどうしようもないから、こうしたいのだという気持ちで熟すのを待っている時期だ。これは逃避かもしれないというためらいもあるのではこわい。生まれてきて生きていくひとりの人間として、女という性がどういう表われ方をしていくのかをみる楽しさと同時に、生きていくことがこわくて仕方がない。レールの上に乗って気分的に抵抗しつつ生きてきた位で、これから先にレールがないのに気づきたいま

らの生に、自分で何を組み立てていくのかと思うと、本音だけ言えば不安な夜をじつとすくまっていたるちっばけな自分をどうしようもなく。

なにもしなくても生は終わるけれど、いまこれをやらなければ自分が後悔するというのが「あこら九州」のみんなの気持ちだと思ふ。それを大切にしたい。でも甘えあつてはいきたくない。「考えるあこら九州」(行動するあこら九州)と併行して、(ぶつかりあうあこら九州)でありたい。

●男である私の 関わりと活動

後小路 久

私は男として女性解放グループに関わろうとしてきた。性差別を考へることなしに人間の解放は考へられないと思つたからである。乱暴な言い方かもしれないが、これは資本家と労働者の関係に似たものがあるように思ふ。より虐げられた女の側からの運動が、男の、そして男の運動の前に現われるとき、男の運動も本ものになっていくだろう。

しかし、これは私の頭の中だけの思いであり、現実にはどうか、明確な答はない。そのために、時々、いや、しばしば不安になる。が、私の周囲で性の問題を考へるグループは、女だけのようにならぬ、それが「あこら」に関わる主な理由である。

「あこら九州」では、月に一度の学習を中心とした活動をしているが、活力のある、魅力的な活動とは必ずしも言えない。

面もある。メンバーの定着・増加がなかなか困難な面からもうかがえるかと思う。もちろんこの一点のみで断定することはできないが、固定したかのようにみえるメンバー相互の中にも充実感はあると言えるか、自信をもつて「ある」とは言い得ないように感じる。

その原因は、——私自身もそうなのだが——目標が不明確というか、漠然としていてからではないだろうか。そのために学習テーマが個々の生活に密着しておらず、無力な感じに陥りがちなのではないだろうか。これは、私を含めて個々のメンバーが切実な問題を出していないからかもしれないし、学習の進め方に問題があるのかもしれない。私も、自分のかかえている問題は何かの、それをどのようにするか、切実に認識するところまでつきつめていないためであろう。私自身の無力感は、多分これに由来するのだから、他の人たちにも共通するものかどうかはわからない。

●全国の会員と 交流したい

小島サカエ

「新聞で知った」といって、例会へ来る人は、女性問題を学びたい、という人が多いが、おむね講師の話を聞きたいようである。現在「あこら」など本誌をもとにレポーターをきめ、それらについて話し合っているが、私は人の言葉がそれなりに人生のひだに触れる思いで、スバラシイとありがたくうけとめている。だが、学びの方法をこころで系統だてて

行なう必要を感じている。そこでお願いだが、「あこら」全国会員には、女性問題有識者が大勢いられるので、「話にいつてあげよう」という方がいたらぜひお願いしたい。

今まで各拠点の自主性を尊重するあまり、先輩拠点の情報が等閑視されたきらいもある。

「あこら」の全国組織に機動性をもたせ、実際のふれあいの中から、各地域の実態をとらえる活発な交流がのぞましい。

早速、「女性学」の開講が、のぞまれる。ドシドシ具体的な提案を教えて下さい。いずれ社会教育と学校教育の交流が図られるといいと思う。

また働く女の給料は男の半分、就職から昇進、昇給まで、あらゆる差別をうけている実態調査等を行なうなど、実際活動を展開する方向へもっていくべきだろう。しかし働く女も、企業の厳しい経済現状に加えて結婚・出産で辞めていけば差別を正当化されることになるし、仕事への取りくみ方、実力の向上など、そして人間関係のむずかしさ等、大へんなことばかり。

齊藤千代さんの話のように「社会を変えるには」身近なことから「自分を変えること」を努めねばならないが、拠点組織としては、心理療法専門家の継続的指導などのぞましい。

また現在、女ならやってみな」の自主上映をめざして「あこら九州」が他のグループと仲良く共同作業をしているが、これが他に広がり、他グループとの交流が盛んになり、問題解決への力の結集

になっていければと思っている。ともあれ、それぞれの問題提起に対して実行すべき段階への機は熟したようである。

「ベッドからでも参加できる運動にしよう」のやさしさと静かな闘志を大切にするとともに「博多追い山笠」のようにダイナミックな運動をとらえよう。

東京で「あこら事務局」の人々のわが身をむしつてのような献身ぶりを目の当たりにして感動した記憶が忘れられない。

●あこらの鏡よ、 わたしの すべてを映しておくれ

森崎民子

社会に出てから十二年め。自分の可能性に挑戦する勇気が、年とともに小さくなっていくのを惜げなく思っているころ、「あこら」に出会った。せつかく生まれてきたのだから、女に生まれて楽しかったといつて死ぬるようになりたいたいと思う幼かりしころは、男に生まれとけばよかったなどと、まるで自分が選択をまちがって出生したようなことを言っていたものだ。まがりなりにも、その気持ちの後退して、「わたしはおんな」という現実を前向きにとらえられるようになったことを、私自身のために喜ぼう。

家が商売をやっている、父も母も同じように働いていたせいか、それとも早くに(小五のとき)母を病気でなくしたせいか、はたまた上から三姉妹の三番め、第二人の女上位の姉弟の関係からか、世

間でいわれる、おんなだから〇〇してはいけない”などは、おかげで言われずに成長した。

母が死んで店は縮小したが、家庭的なことは、すべて父ひとり二役をこなした。炊事、洗濯、掃除、すべて父がした。父の意地もあったのだろうが母の仕事に私にさせるようなことはなかった。

五人とも育ってしまった今、父は七十二歳。よく叱られ、泣いて謝ったことも多かったが、このごろは叱られることもない。父が老いたのだろうか、われわれ姉弟が分別がついたのだろうか。

こういう家庭環境で育った私なので、今もわがままを通して、したい放題のことをしているであろう。個人生活は別として、生活を支える勤務時間が、真剣勝負までいたらず残念な思いをしている。決してさぼっているわけではない。勤務態度は良好(自己評価)と思っている。

強いというなら、あたりまえにできるといふことが、物足りないのだろうか。全神経を張りつめて仕事をしているという緊張感がほしい。もちろん、いつもいつもその連続では身体がもつまいが……。

しかし、やはり何か物足りない。迷いはそこから来るのだろうか。何か、ほんとうにやりたいこと、真剣勝負ができるものをさがさなくてはいいけない。日が暮れてしまう前に。

そのために、鏡よ鏡、あごらの鏡よ、わたしのすべてを映しておくれ。

「自分が変われば 社会が変わる」

——齊藤千代さん 福岡市で講演

十月五日、地婦連の主催、福岡市社会教育委員会の後援で、「西区婦人のつどい」が開かれたが、「国際婦人の十年」を考えるつどいにし、婦人会に新風を吹き込みたいとの要望で、(あごら)事務局の齊藤千代さんが招かれ、一時間二十分にわたり講演した。題は「自分が変われば社会が変わる」。

女権論者だった母親との内面的かつとうを乗り越え、母を受容する過程の中で婦人問題に目覚めていった体験が語られる中で、メキシコ会議参加の模様や、世界行動計画の意味、自分を変える具体的な方法、草の根の女性解放運動の状況が話された。その中で、「女の天王山」といわれている「男女雇用平等法」と「労基法改定」の問題点につき、女が受け身でいることは、もはや許されなくなろうとしていると訴えた。

市川房枝さんの「権利の上に眠るな」を引用し、簡単に効果もすばらしい運動、それは、選挙——女自身が選んだ人、女の味方に投票することこそ、女の状況を変える何よりの方法だと説いた。

最後に、イギリスの詩「涙に浸したひと切れのパンを食べたものでなければ共に語るに足りない」を引用、女の痛みを頷ちもっている皆さんとともに、今後とも女の運動を続け、よりよい社会を目指したいと思います。と結んだ。会場の千

人近い聴衆の中にはハンケチで目を拭く人もあちこち見られ、深い感銘を与えた。婦人会で婦人問題の本格的な勉強会を開いたのは初めてのこと。行政のしなやかさを自分たちでここまで盛りあげた婦人会の真剣な熱意にうたれた。

また、齊藤さんのような比較的名無名なしかしその筋では知られた地道な活動家を招いたことも、画期的なこととして「外からの批判はどうでもできる。内から揺り動かさねば」と説いた。西区婦人会長や田辺幸子社会教育委員長(あごら会員)などの識見・勇気・行動力に、敬意と拍手を贈りたい。なお、会場にはいろいろの展示物や催しもあり、盛大な初の「西区婦人の集い」だった。

「あごら九州」会員も、会場内で「あごら」を販売したほか、アンケートをとるなど、めまぐるしい時間を過ごした。はるばる下関から駆けつけて下さった方もあり感激した。

なお翌六日、会員有志が志賀島の一角で楽しい歓談のひとときを過ごした。(S)

講演によせて

目からウロコが落ちた

岡北博子

五月末のぬけるような若い空を私は翔んでいった。といっても東京へ向かう飛行機の上。東京へ嫁いだ娘の盲腸炎の手術看病のため上京の時のことである。

娘は高校の英語教師なのだが結婚しても職場を離れず、子どもができたらずめらるだろうと期待していた私たち夫婦の思

いも見事にはずれた。生後四か月になった坊やをさっさと無認可の保育園に預けて職場に復帰し、学校と保育園と家庭の間を駆け回り回っている。もちろん若いパパの理解ある態度がどんなに彼女の支えになったか。戦中派の私の夫には、納得いかぬことばかりだったようだ。

私が着いた翌日から始まった二週間余りの保育園通いの毎日で、私の保育園観がいかに偏見に満ちていたものか思い知らされた。朝九時半から五時まで、一週間のスケジュールどおり、手作りのおやつ・中食・離乳食・ひるね、その間に少しでも日光浴をと近所の公園に散歩。保母さんが一人を抱っこ、一人をおんぶ。お座わりできる子は乳母車に二人ずつ乗せての大作進。見る分には呑気そうだが、やっているほうはとても大変だろう。車と事故に気をつけて——。

夕方迎えの親に保育日記を渡し、その日の便通・食欲・情緒の面まで詳細に、母親が気づかぬ面まで観察して。本当に子どもを知り、子どもを愛してなければできない仕事だと思った。設備も決して良くはなく、保育料から察して報酬も少ないであろうし、無認可だから待遇もきつと良くないだろう。お化粧気もない若い保母さん。我が子二人を他に預ける人たちを、ここに引きつけているのか。やはり社会参加の意識だろうか。娘の「老いるまで働き続けたい」という気持ちと共通のものだと思った。

坊やが初めて歩いたという記念すべき時さえも、見たのは娘ではなく、保母さ

んだったかも知れない。親と子にとってかけがえのない瞬間さえ、仕事には代えられないと思って耐えている娘。後悔ばかりの人生かもしれない。でも、何か打ち込める仕事を持っている娘の強さを羨ましく思いながら、本当に「目からウロコが落ちた」そんな気持ちの二週間を過ごした。戦中派の夫の「目のウロコ」も少しでも落としたいと思いつながら帰途に着いたものだった。

あれから数か月。斉藤千代さんの講演を聞いた。「自分が変われば社会が変わ

女に生まれてよかった!?

——西区婦人のつどいアンケートから——

斉藤さんの講演を機会に、当日、入場者(約八百名)にアンケート用紙を配り、④「女に生まれてよかったか」⑤「来世は女に生まれたいか」につき、簡単に調査した。(無記名・該当番号記入式)対象は、二十代から八十代にわたる地域の婦人、四十代と五十代が中心で、この二世代で六二・七%を占めていた。有効回答票は四百九十一票(男性からの回答は無効とした)。

●七割が女に生まれてよかった

比較的年配の婦人が多かったため、「よかった」は少ないのではないかと想像していたが、意外にも七一・五%(三百五十一人)が「よかった」と答えた。「よくない」は一四・五%(七十一人)にすぎず、「よい点も悪い点もある」一三・四%(六十六人)と、ほとんど変わらなかった(図1)。

さらに驚いたことに、「よかった」と答えた人は、高年齢になるほど多く、五

「る」というお話を聞き、まさに数か月前の自分を思った。まず自分の偏見を捨てなければ何も変わらない。そのためには、どんなことでも身をもって知ることとがいかにか大切か。あの東京で過ごした二週間の思い浮かべながら、「権利の上に眠るな」と重ねて言われた斉藤千代さんの話を肝に銘じた。

まだその権利以前に在るあの手作りの匂いのする保母さんたちのことをどう考えたらいのか、私には答が出ない。

十代は七四・七%、六十代は七六・三%、七十代は七九・四%に達した(図2)。

常識的には、戦後、女性解放され、女が自分の生を「よい」と思う率が高くなったのではないか、——したがって若年層ほど「よい」と思う率が高いのではないかと想像していたが、調査の結果は逆だった。

その原因については設問を設けなかったで、不明だが、高齢者ほど、自分の生を「よかった」と肯定するのではないかという意見や、女の生き方を選択する

余地がなかった時代なので、かえって不満がなかったのではないか、などという推測がされた。あるいは、男の暮らしの責任の重さに比べ、「女でよかった」と感じたのかもしれない。生きる楽しさは、案外、女の側にある、という想像もできる。

●「来世も女に生まれたい」は半数弱

次に、質問Bで、「もしも来世というものがあり、再び人間に生まれることができ、性を自由に選べるとしたら、男と女の、どちらに生まれたいか」を問うた。結果は、「また女に生まれたい」が、四五・八%(二百二十五人)でトップ。次が、「新しい経験として」男に生まれたい」で三四・八%(百七十一人)。

「女はつまらないから」今度こそ男に生まれたい」は、一五・七%(七十七人)にすぎなかった(図3)。

年代別に見ると、「また女に生まれたい」は、三十代よりも四十代、五十代より五十代……と、高年齢になるほど高くなっており、三十代では三八・八%だが、七十代では六七・六%になっている(図4)。しかし、今度こそ男に生まれたい」と願うのは、五十代が最高で二一・五%、次が六十代(一五・三%)と三十代(一五・〇%)で、四十代は一三・〇%、七十代は八・八%であった(図4)。

「新しい経験として男に生まれたい」という好奇心派は、若い世代ほど多く、二十代は六〇・〇%、三十代四二・五%、四十代四五・三%であるのに対し、五十代は二九・一%、六十代二二・〇%、七十代二〇・六%にとどまった(図4)。

●「よかった」人も、四割は「来世は男」希望

質問Aに対する回答と、Bに対する回答を相関させてみると、図5のとおりとなる。

「女に生まれてよかった」と答えた者(三百五十一人)のうち、「来世も女に」は、六〇・四%にすぎず、「新しい経験として男に」が三二・二%。さらに、女はつまらないから今度こそ男に」という矛盾した回答も五・七%みられた。

一方、「女に生まれてよくなかった」者(七十一人)の過半数、五七・七%は、「今度こそ男に」と願っているが、「新しい経験として男に」も三九・四%と多い。「また女に」は、さすがに二・八%のみであった。

「女に生まれて、よい点も悪い点もあった」中間派(六十六人)は、「新しい経験として今度男に」が四五・四%で最も多く、次が「今度こそ男に」が二四・二%で、「また女に」は一六・七%、「どちらでもよい」が一〇・六%、「わからない」が三・一%で、未来志向も比較的あいまいであった(図3)。

ただし、それにしても、世論調査では男性側の回答「男に生まれてよかった」は一〇〇%近く、来世も男に「も一〇〇%近いことを考えると、女であること」の肯定率は、非常に低いと言わなければならないまい。男女の回答がほぼ同じ傾向を示す目こそ、男女同権が確立した日と言えるだろう。

図1. 女に生まれてよかったか

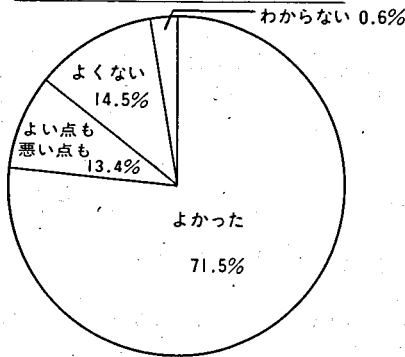


図3. 来世も女に生まletたいか

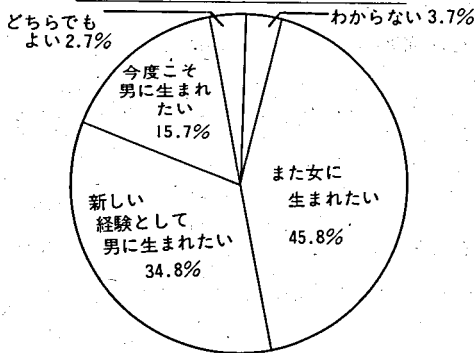


図5. 現在と未来の関係

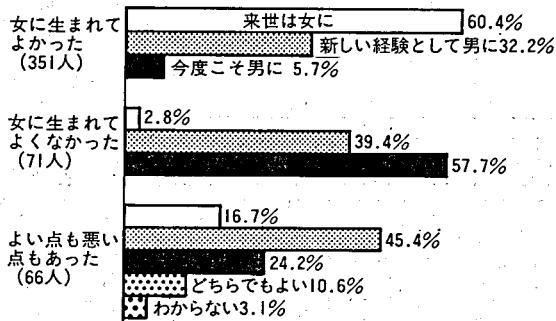


図2. 年代別に見た「よかった」層

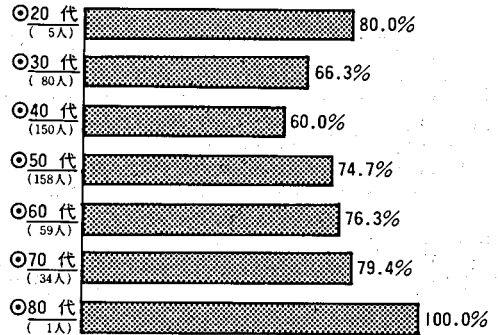
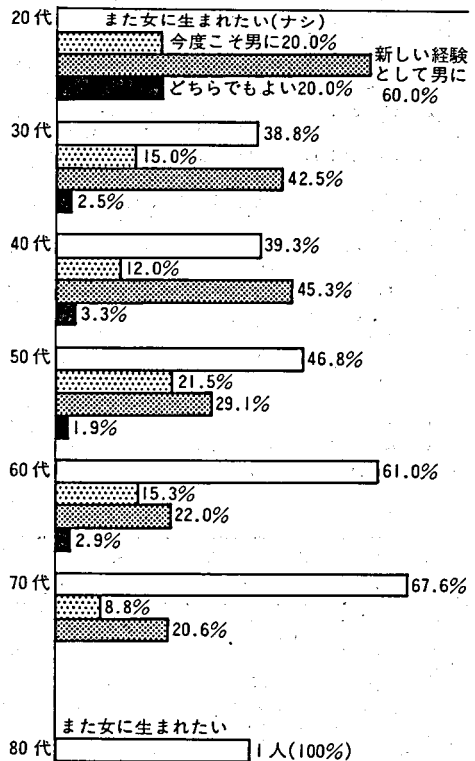


図4. 年代別にみた「来世志願」



女ならやってみな!

アントニア

十二月一日上映

師走の博多に

女たちの熱い

メッセーシが届く

〈映画自主上映〉

「この映画を自主上映しよう」と(あごら九州)でプランニングしはじめた折しも、(あんふあんで)のグループも進行中と聞き、「じゃあ、一緒にしよう」ということになった。初対面なのに息も合ったみたいで(へじょうもん)の人も加わり、「いい映画だ。見よう、見てもいい」との気持ちは一っ。トントン拍子に話は進み、十二月一日、上映前に実行委員たちは、仕事の為、子どもを寝かせた夜、カンカンガクガク。成功させたいと張り切っている。会場、婦人会館の応援もウレシイ。託児つき。(K)

衆議院の 女性議員ほぼ倍増

十月七日実施された衆議院選挙で、一名の女性議員が誕生、参議院の十七名を加えると、女性の国会議員は二十八名に増加した(従来は二十三名)。解散前の衆議員女性議員は六名(自民一名、社会二名、共産三名)だったが、今回は、自民一名、社会二名、共産八名(共産系無所属一名を含む)が当選、特に共産党の女性議員の進出が目立った。

<女のつどい・女の講座>

日	時	テ	マ	会	場
11月10日(土)	13:30~	女たちは労基法改悪を阻止するぞノ 決起集会	<11・10決起集会実行委員会(婦人民主クラブ、社会主義婦人会議、アジアの女たちの会、他)>	全通会館	
	19:00~21:00	女と男の井戸端会議	<ホビット村学校>	ホビット村学校	03-332-1187
11日(日)	10:00~14:00	母と子の理科教室	<中山文庫>(毎日曜日)	中山文庫(松本市)	0263-58-5935
	13:00~	あごろ九州・例会		福岡市婦人会館	092-987-3775
12日(月)	19:00~	あごろ武蔵野・例会		東村山社会福祉センター	
	18:30~	鉄連の7人とともに性による仕事差別、賃金差別と闘う会・運営委員会(第2、第4月曜日)		ジョギ	03-357-9565
14日(水)	18:30~	働く女性の相談室	<行動する会・労働分科会>(毎水曜日、予約は毎日)	"	
15日(木)	18:30~	刑法改悪に関する婦人会議・定例会	(毎木曜日)	"	
16日(金)	18:30~	私たちの男女雇用平等法をつくる会12・1集会準備委員会		"	
	18:30~	あごろ21号編集委員会反省会と22号のテーマについての話し合い	<あごろ21号編集委員会>	あごろ読書室	03-354-9014
17日(土)	19:00~22:30	女のパーティー	<ラベンダーギャングズ>	すべーす JORA	03-203-6022
18日(日)		あごろミニ34号編集会議	<あごろ京都>	ジャンバラ	075-821-3579
19日(月)	18:30~	労働分科会	<国際婦人年をきっかけとして行動する女たちの会>	ジョギ	
22日(木)	18:00~21:00	「1980年に向けて」	<行動する会・定例会>	"	
25日(日)	13:00~16:00	「高学歴女性の就業に関する意識調査」	トヨタ財団研究助成金による調査結果報告会	京大会館	
	10:00~16:00	全日本フェミニストの会・全国大会		主婦会館	03-265-8111
	18:00~21:00	「80年・女の力が世界を変える——女性と経済——」	ジェーン・マーズ	紀伊国屋ホール	03-354-0131
26日(月)	18:00~21:00	東京講演会(問い合わせ フェミニストの会 03-401-2066)		毎日国際ホール	06-341-1137
		「80年・女の力が世界を変える——女性と経済——」	ジェーン・マーズ		
27日(火)	18:30~	「自己形成史を語る」	<あごろ北東京・例会>	婦人協同法律事務所	03-985-3308
28日(水)	18:30~	あごろ北海道・例会		ひらひら	
12月1日(土)	13:00~17:00	私たちの男女雇用平等法をつくる会大会集「就職差別について」	<実行委員会>	渋谷勤労福祉会館	03-462-2511
	14:30~	映画会「女ならやってみな」「アントニア」	<女たちの映画会福岡実行委員会>	福岡市婦人会館	
2日(日)	19:00~	パーティーどん	<56番館>	すべーす JORA	
8日(土)	19:00~21:00	女と男の井戸端会議	<ホビット村学校>	ホビット村	
16日(日)	13:00~16:00	日本女性学会・懇親パーティー		京大会館	
21日(金)	18:30~	あごろ21号合評会・あごろ忘年会	<あごろ事務局>	あごろ読書室	
22日(土)	13:30~17:00	「1980年に向けて」	<行動する会・総括集会>	渋谷勤労福祉会館	03-462-2511
	19:00~22:30	女のパーティー	<ラベンダーギャングズ>	すべーす JORA	
23日(日)	19:00~21:30	JORA一周年記念パーティー	<JORA>	"	

あごろ21号合評会・忘年会 とき 54年12月21日(金) 18:30~22:00
 ところ あごろ読書室 どなたでもどうぞ!

各地のあごろ連絡先

あごろ旭川 旭川市神楽岡一条五丁目3 田代慶子 0166 665 6237 7078 11	あごろ札幌 札幌市中央区南25西12ニュー藻岩503 高橋芳恵 011 563 6917 7064	あごろ北東京 川口市芝北町3413 宗久知恵子 0482 65 0241 7332	あごろ武蔵野 小平市小川町1-763-86 丹羽雅代 0423 43 6749 7187	あごろ京王 府中市晴見町3-21 関和子 0423 62 4705 7183	あごろ神奈川 川崎市多摩区生田4634 沼田千恵子 044 933 9079 7214	あごろ東海 愛知県愛知郡東郷町和合ヶ丘1-12-9 伊藤汎美 0561 3 9 2386 7470 01	あごろ京都 京都市左京区北白川久保田町36-4 塚崎美和子 075 791 4623 7606	あごろ阪神 尼崎市武庫之荘3-6-6 木沢みすず 06 431 5376 7661	あごろ九州 福岡市西区笹丘2-4-6 小島豊子 092 521 7624 7810
---	---	---	--	--	---	--	---	---	---

「編集後記」 「運動体としての「あごろ九州」を討論しよう、の機運が高まり、この号では、それぞれの思いをさらけ出してみました。二十代から五十代まで、年齢も考え方も生活基盤も多様な「あごろ九州」多様な思いを、どのような「運動」にするか、この号が、前進のための「勢い水」に……と願っています。見たい、見たい、と思いつつ、なかなか見えない……。見えるものも見えないのか、それとも見えないのか……。もどかしです。(さ)